

明恵撰『摧邪輪』巻中 訓・註 試稿

米 澤 実江子

【抄録】（作業方法）

当研究班は、筆者による『摧邪輪』の訓読文・付註・現代語訳に対し、過年、本庄良文先生が巻中より施された添削、ならびに先行する諸研究を踏まえて再検討を行なうものである。

キーワード・明恵 『摧邪輪』 訓読文 註記

はじめに

当研究班の課題は「寛永年間版『於一向専修宗選択集中摧邪輪』（以下『摧邪輪』）巻中 訓読文・付註・現代語訳」である。

ここでは、先ず『摧邪輪』の内容を簡略に述べ、次に諸本ならびに先行する訓読文・現代語訳とを挙げ、最後に本稿における成果報告の範囲と凡例とを示す。

明恵撰『摧邪輪』巻中 訓・註 試稿（米澤実江子）

【内容】

『摧邪輪』（三巻）は、明恵房高弁（一一七三～一二三二年。以下明恵）によつて建暦二年（一二二二）に、法然房源空（一一三三～一二二二年。以下法然）撰『選択本願念仏集』（以下『選択集』、一一九八年）の内容に対して、法然の（誤ったとする）仏教解釈を糾すために撰述された書である。明恵が批判し糾さんとする内容は、大きな過失として「撥_ニ去菩提心_一過失」と「以_ニ聖道門_一譬_ニ群賊_一過失」である。就中、前者には五種の過失（附、第五門決之余）を挙げ、撰述の翌年には『摧邪輪莊嚴記』を著わし、冒頭において、『選択集』には大小十六の過失があり、『摧邪輪』では十三種を、『莊嚴記』では三種を批判したとする²⁾。

明恵は巻上の始めに、『選択集』を批判する理由を述べ、次いで、批判の基本的立場として、自身の「菩提心観」・「大乘仏教観」・「善導解釈」等を明示する。この内容を踏まえて、巻上には五種の批判の内、第一から第三までを、巻中には第四と第五を、巻下には第五門決之余

と「以聖道門」譬群賊「過失」を挙げ、それぞれに批判を展開する。

【諸本】⁽³⁾

写本

※以下には、鎌田茂雄・田中久夫校注『鎌倉旧仏教 続・日本仏教の思想3』（岩波書店、一九九五年。以下『鎌倉旧仏教』）「収載書解題」掲載の二本を挙げる。

① 仁和寺所蔵。

「卷上」正和五年（一三一六）書写・「卷中」元応元年（一三一九）書写・「卷下」寛喜三年（一二三二）書写の、三卷各由来を異にする書写本を、尙怡が享禄三年（一五三〇）に校点を加えて書写した（取集本）。

② 高野山大学図書館所蔵。

神護寺禅海による永正五年（一五〇八）書写本を、丹波神尾山寺栄海が慶長十五年（一六一〇）に書写。

版本

③ 古活字版 宮内庁書陵部所蔵・叡山文庫所蔵。

④ 寛永年間版 佛教大学図書館・他所蔵。

翻刻

⑤ 『増補改訂 日本大藏經』七四「華嚴宗章疏三」（鈴木学術財団、一九七四年。底本、寛永年間版）。

⑥ 『浄土宗全書』八（底本、寛永年間版）。

⑦ 『鎌倉旧仏教』（底本、寛永年間版）。

【訓読文・訳・註】 訓読文

⑧（卷上・中・下）安藤文雄編『摧邪輪』（於一向専修選択集中摧邪輪）三卷・『摧邪輪莊嚴記』一卷』（大谷大学真宗総合研究所、一九九六年。底本、『鎌倉旧仏教』掲載翻刻（『摧邪輪莊嚴記』は寛永三年版）。

⑨（卷上）『鎌倉旧仏教』（底本、寛永年間版）。
現代語訳

⑩（卷上）佐藤成順訳「摧邪輪（抄）」（塚本善隆責任編集『日本の名著5 法然』中央公論新社、一九八三年〈以下、『法然』〉。底本、寛永年間版）。

校・補註

⑪（卷上）『鎌倉旧仏教』書き下し頁頭注

⑫（卷上）『法然』

⑬（卷中・下）末木文美士「『摧邪輪』卷中・下引用出典注記」（『佛教文化』第十四卷十七号、一九八四年）。

【報告範囲】

卷中は、「撥去菩提心過失」中の批判（第四・第五）であり、既に卷上において明示した基本的立場をふまえた上で展開されている。よって文中においては、「如上述」とする他、上巻に引用した典籍ならびに重複する記述（説明）については、詳細を省略した上で批判内容に即した見解のみを述べる場合が多い。しかしながら、当研究班

では巻上の作業は課題ではないため、当研究班としての巻上の内容を巻中の現代語訳に反映させるより良い解決方法を見いだせなかった。よって本来であれば現代語訳までを挙げなければならないが、本稿では「現代語訳」を除き、翻刻の他に「訓読文」と「註記」のみを挙げ、また紙数の都合上「巻中冒頭より五丁裏」までを挙げて「試稿」とした。

【凡例】『摧邪輪』班

一、底本は、佛教大学図書館所蔵「寛永年間版（準貴重書 G極楽寺／377）」である。

一、始めに訓読該当箇所を翻刻し、次に訓読文とその註記（通し番号）を挙げた。

一、翻刻にあたっては、底本の字体を残し、書き下しに際して、通行の字体に改めた。

一、翻刻部、【】の中、丁数とオ（ウ）を示す場合は、底本の丁数とその表（裏）を指し、漢数字と上（下）を示す場合は『鎌倉旧仏教』本刻部の頁とその上（下）を指す。

一、へゝは原割註。

一、訓読文において、訓点は原則底本に従いつつ適宜補った。

一、訓読文において、典籍引用部は改行して二文字下げた。また引用末の「云々（云云）」は、「ゝ」と云々（云云）。とした。

一、訓読文において、明恵の設問とその答えは、それぞれ改行した。

一、註記における引用出典の略称は以下の通りである。

註

『昭法全』（『昭和新修法然上人全集』）

『浄全』（『浄土宗全書』）

『大正蔵』（『大正新脩大蔵経』）

『望仏』（『望月佛教大辞典』増訂版）

『中仏』（中村元著『広説佛教語大辞典』）

『織田仏』（織田得能著『織田佛教大辞典』）

『大漢和』（諸橋轍次著『大漢和辞典』）

『日国』（『日本国語大辞典』第二版）

（1）『鎌倉旧仏教』、三一八～三一九頁上。

（2）『浄土宗全書』八、一〇〇頁上。

（3）『補訂版 国書総目録』三、六四三頁。『佛書解説大辞典』四、四五頁。『鎌倉旧仏教』五一～五一六頁。拙稿「六波羅蜜寺所蔵『摧邪輪』について」（『高橋弘次先生古稀記念論文集 浄土学佛教学論叢』一〈山喜房佛書林、二〇〇四年〉所収）等参照。高野山大学図書館所蔵本は、もと高山寺にあった写本の転写本であり、袋中良定（一五五二～一六三九年）が晩年に抄写・付自註して作成した『摧邪輪抄書』の底本とした『摧邪輪』と同一祖本である（拙稿「檀王法林寺所蔵袋中良定『摧邪輪抄書』について」〈藤本先生古稀記念論文集『法然佛教の諸相』法蔵館、二〇一四年〉参照）。

【付記】

当研究班研究課題の底本として、佛教大学図書館所蔵本を使用させて頂きました。佛教大学図書館のご厚情に感謝申し上げます。また、研究班始動当初は、研究班外より本庄良文先生・服部純啓氏にご参加頂き、貴重なご教示を賜りました。ここに重ねて御礼申し上げます。

【一丁オ／三四〇頁上】
於^テ一向専修宗選擇集^ノ中^ニ推^ク邪輪卷中^ニ至^ル第五門^ニ決^ニ一半^ノ〈

〈訓〉

一向専修宗選擇集の中に於て邪を摧く輪 卷中〈第五門に至りて一半を決す〉

從^リ此第四破^下云^ニ雙觀經^ニ不^レ說^カ菩提心^ヲ并云^ニ彌陀^ノ一教止住^ノ時無^ニ菩提心^ノ過^上者集曰^ク

末法萬年後餘行悉滅^{シテ}特留^ニ念佛^ノ之文

無量壽經下卷云^ク當來之世經道滅盡^{セシ}我以^ニ慈悲^ヲ哀愍^{シテ}特留^ニ此經^ノ止住^ノ百歲^{ナリ}其有^ニ衆生^{ハム}値^ニ此經^ノ者隨^ニ意^ノ所願^ハ皆可^レ得^ル度^ス

私云〇此經止住者即念佛止住也所以然者此經雖有^ニ菩提心之言^ノ未^レ說^カ菩提心之行相^ヲ〇而說^ニ菩提心行相^ノ者廣^ハ在^ニ菩提心經等^ニ彼經先滅^{シテ}菩提心之行^ヲ【一丁ウ】何因修之^ニ〔已上集文〕

〈訓〉

此れより第四に、『双卷經』に菩提心を説かずと云ひ、並びに弥陀の一教止住の時、菩提心無からんと云ふ過を破せば、『集』に曰く。

末法萬年の後、余行悉く滅して、特に念仏を留むるの文。

『無量壽經』下卷に云く、「當來の世に經道滅尽せんに、我れ慈悲を以て哀愍して、特に此の『經』を留めて止住せしむること百歳なり。其れ、衆生有りて、此の『經』に値わん者は、意の所願に隨ひて、皆度することを得べし」

私に云く〇此の『經』の止住とは、即ち念仏の止住なり。然る所

以は、此の『經』には、菩提心の言有りと雖も、未だ菩提心の行相をば説かず。〇而も、菩提心の行相を説くことは、広くは『菩提心經』等に在り。彼の『經』先に滅しなば、菩提心の行、何に因てか之を修せん。〔已上『集』文〕

註

- (1) 「止住」、とどまり住する事・住む事(『日国』六、六六九頁)。
- (2) 「余行」、念仏以外の修行・雜行(『中仏』下、一七〇〇頁)。
- (3) 「悉滅」、すっかりほろびること(『日国』六、八六八頁)。
- (4) 「當來」、來世・來るべき世・將來(『中仏』下、一二五二頁)。
- (5) 「世」、ある時代(『日国』十三、四六六、四六七頁)。
- (6) 「經道」、經典に説く道(『織田仏』二五一頁)。仏の教え。經文に説かれてゐる教え。仏道(『日国』四、四七五頁)。^{【参考】}『經』の意。
- (7) 「滅尽」、ほろびつること。めぢじん。物を形跡をとどめないほどに消滅させること(『日国』十二、一一五四頁)。
- (8) 「哀愍」、神仏等が人々を哀れんで情けをかける事(『日国』一、六四頁)。
- (9) 「意」、思慮・心・思い・意識・意向(『中仏』上、三八頁)。考え・心に決めた事・志し(『日国』一、七六〇頁)。
- (10) 「度する」、「渡す」の意、迷いの此岸からさとり彼岸に渡し救ふこと、救い、教化(『中仏』下、一二二八頁)。^{【参考】}苦を脱する。
- (11) 『無量壽經』(『大正藏』十二、二七九頁上)。
- (12) 「行相」、「仏教語」心のはたらきによつておこる対象の認識。はたらき・心のはたらき・「行」とは心がおもむく事「相」とはこれを受け取る事(『中仏』上、二九四頁)。
- (13) 『選択本願念仏集』第六章(『昭法全』三二五頁)。

決曰汝之所^レ知^ル菩提心者其^ハ躰^レ是何物乎此經說四十八願^ヲ豈非^ニ菩提心^ニ耶
如^ニ廣釋菩提心論^ノ第一云菩提心有^ニ二種^ハ一願心^ニ二分位心^ニ云云又
孔目章第二發菩提心章云菩提心者菩提梵語此^ニ翻^ニ名^ニ果道^ト果德^ト圓通^ト
故曰菩提^ニ於^ニ大菩提^ニ起^テ意^ヲ趣^{スル}求^ニ故名^ニ發菩提心^ト然此發心經亦名^ニ願^ト
要^ニ大菩提^ニ令^ニ來^ニ屬^ニ已^ニ故名^ニ願^ト

〈訓〉

決して曰く。汝が知る所の菩提心とは、其の体、是れ何物ぞや。此の
『經』に四十八願を説く。豈に菩提心には非ずや。『広釈菩提心論』
の第一に云ふがごとし。

菩提心に二種有り。一には願心¹⁵、二には分位心¹⁶と云云

又『孔目章』の「第二發菩提心章」に云く。

菩提心とは、菩提は梵語、此には翻じて果道¹⁸と名づく。果德¹⁹円通²⁰
するが故に菩提と曰ふ。大菩提に於て、意を起して趣求²²するが故
に發菩提心と名づく。然も此の發心、『經』²⁴にも亦、願と名づく。
大菩提を要して己²⁵に來たし屬せしむるが故に願と名づく、と。

註

- (14) 「体」、本体・そのものの自体・実体・根本のもの・本質・性・自体
（『中仏』中、一一〇〇頁）。
- (15) 「願心」、ねがう心・願いを起こす心・さとりまたは浄土往生等をね
がう心（『中仏』上、二三八頁）。【参考】誓願（誓うこと）。
- (16) 「分位心」↓「分位」状態・變化發展の段階（『中仏』下、一四七一
頁）。【参考】プラスターナ（発趣・行動を起こしている人のメンタ
ル）。
- (17) 蓮華戒造、施護訳『広釈菩提心論』（『大正藏』三二、五六四頁、中）。

(18) 「果道」、果徳に導入する道路（『摧邪輪』中、三丁才参照）。

(19) 「果徳」、結果にそなわつた功徳・ニルヴァーナに常樂我淨の四徳が
ある・さとりの上の功徳（『中仏』上、二二八頁）。

(20) 「円通（えんつう）」、絶対の真理は全ての物にあまねく行き渡つて
いるの意味・「周円融通」の略・仏菩薩の悟りの境地・心性は普遍で
ある事を「円」といい、その妙用が自在な事を「通」という（『中仏』
上、一四二頁）。「円通」、①あまねく通じ達していること。②仏語。
仏菩薩の悟りは円遍融通して、作用自在であること（『日国』二、七
六九頁）。

(21) 「起意」、考えを起こす。考え始める（『大漢和』十、八三五頁）。

(22) 「趣求」、願う事（『中仏』中、七八八頁）。

(23) 「発心」、①信仰の道に入る心を起こすこと。特に、仏教で、菩提心
を発すること。仏の悟りを得ようとする心を起こすこと。仏道にはい
ること。出家すること。發菩提心。發意。發起。發信。②思い立つて
ある物事を始めること。發起（『日国』十二、一四二頁）。

(24) 『經』、【参考】『菩薩地持經』「菩薩初發心。是一切正願始」（『大正
藏』三〇、八八九頁中（高峯了州『華嚴孔目章解説（二）』）へ『南都仏
教』一二、一九六二頁）。

(25) 「已」、「孔目章」「來屬已」によって訂正。【用例】三丁才三行
「已心」（己心）。

(26) 智儼『華嚴經内章門等雜孔目章』（『大正藏』四五、五四九頁上）。

天台觀經疏釋ニ經發菩提心言曰菩提心是願起意趣一向名爲發心
菩提是道佛果圓通說爲菩提慧遠觀經【三四〇頁下】疏云發菩提心
明起願也菩提是道佛果圓通說【二丁才】爲菩提起意趣一向
名爲發心一要而謂之如佛所得我亦當得如是等也

〈訓〉

天台『観經の疏』に『經』の發菩提心の言を釈して曰く。

菩提心は是れ意を願起して趣向⁽²⁸⁾するを、名づけて発心と為す。菩提提は是れ道⁽²⁹⁾、仏果円通するを説きて菩提と為す⁽³¹⁾、と。

慧遠⁽³²⁾の『観經の疏』に云く。

發菩提心は、起願⁽³³⁾を明かすなり。菩提提は是れ道、仏果円通するを説きて菩提と為す。意を起して趣向するを、名づけて発心と為す。要をもて之を謂へば、仏所得のごとく、我も亦、当に得べし。是のごとき等なり⁽³⁴⁾、と。

註

(27) 「天台」、智顗・智者大師・天台大師。天台宗の開祖（『隋天台智者大師』〔『大正蔵』五〇、一九一頁〕・『望仏』四、三五五六〜三五五七頁参照）。

(28) 「趣向」、目的を定めてそれに向かつていく事・実践する事・一定の方向に向かう事・果報に導かれる事・おもむく事（『中仏』中、七九三頁）。目指す事に向かつていく事・目的に向かつて進む事・おもむき・心持ち（『日国』六、一三六一頁）。

(29) 「道」、さとりの道・仏道・人間のふみ行うべき道・実践の仕方。

(30) 「仏果」、仏道修行の結果達せられた仏の位・究極の結果・さとり（『中仏』下、一四五二頁）。

(31) 天台『観無量寿仏經疏』（『大正蔵』三七、一九一頁、中）

(32) 「慧遠」、慧遠・淨影寺慧遠（『統高僧伝』（『大正蔵』五〇、四八三〜四八四頁・『望仏』一、二六三〜二六四頁参照）。

(33) 「起願」、神仏に祈願すること。願を立てること（『日国』三、一二一四頁）。

(34) 慧遠『観無量寿經義疏』（『大正蔵』三七、一七八頁、中）。

不空三蔵菩提心義引ニ大日經疏云發菩提心者謂生決定誓願一向志求一切智智必當普度法界衆生此心由如幢旗是衆行尊首由如種子是萬德根本若不發此心亦如未託歌羅羅則大悲胎藏何所養育（云云）自他宗顯密二教定判如是

〈訓〉

不空三蔵『菩提心義』に『大日經の疏』を引きて云く。

發菩提心とは、謂く、決定の誓願を生じて一向に一切智智を志求するなり。必ず、當に普く法界の衆生を度すべし。此の心、由し幢旗のごとし。是れ衆行の尊首。由し種子のごとし、是れ万徳の根本。若し此の心を發さずんば、亦た未だ歌羅羅に託せざるがごとし。則ち大悲胎藏に何ぞ養育せられんや、と（云云）。

自他宗、顯密二教の定判、是のごとし。

註

(35) 「不空三蔵」、不空・不空金剛・真言付法第七祖（『大唐故大徳贈司空大弁正広智不空三蔵行狀』（『大正蔵』五〇、二九二頁）。『望仏』五、四三八五〜四三八六頁参照）。

(36) 一行『大毘盧遮那仏經疏』（『大正蔵』三九、六一一頁、下）。

(37) 「決定」、あることが定まって動かないこと。「決定思」三思の一つ（ことをなそうと決定した思い）（『中仏』上、三八一頁）。

(38) 「誓願」、心に願う事・願い・衆生を救おうという願い（『中仏』中、九八九頁）。

(39) 「一向」、心を一方にひたすら向け、他の事を顧みない・ひたすら・ただ一筋・専一（『中仏』上、六五頁）。

(40) 「一切智智」、全てを知り尽くす智・全知者（仏）の智・一切の智の中の最も勝れた智（『中仏』上、六九頁）。

(41) 「志求」、自分から志して求める事（『日国』六、五八〇頁）。

(42) 「法界」、【大乘仏教】宗教的本源を意味するようになった・法の根源・全宇宙の存在を「法」すなわち真理の顯れとみてこれを真如の同義語に使う・法の世界・真理の現れと見て真如の同義語に使う・真理そのものとしてブツダすなわち法身と同義である・全宇宙・【華嚴教學】一面では世界や宇宙と道義、他面では真如や法性と同じ（『中仏』下、一五三〇頁）。

(43) 「幢旗（はんき）」、はた（『大漢和』四、四七五頁）。

(44) 「衆行」、群がり行く・群行（『大漢和』八、二二八頁）。

(45) 「万徳」、多くの徳行・多くの功德（『日国』十二、五八一頁）。仏のあらゆる美德・数え切れない多くの功德（『中仏』下、一五七五頁）。

(46) 「歌羅羅」↓「羯邏藍（かららん）」体内の五位の一つ・受胎の初めから七日間の間・胎児の状態（『中仏』上、二二四頁）。

(47) 「大悲」、大いなるあわれみ（『中仏』中、一一三二頁）。

(48) 「胎藏」、母胎・子宮・胎児（『中仏』中、一一二五頁）。

(49) 「菩提心義」（『大正蔵』四六、九八八頁、上）。

(50) 「定判」、決定的な判定・解釈（『中仏』中、八九三頁）。

約^{セハ}淨土宗^ニ如^ニ善導觀經疏^ノ第二^ニ云^ク言^フ發菩提心^ト者^ハ此^レ明^ニ衆生欣趣^ノ大^ニ等^ヘ云^ク云^ク「具如上引」此又明^ニ菩提心義^ニ以^テ善願^ヲ爲^ス本^ニ道^ヲ綽^リ安樂集^ニ又引^テ淨土論^ヲ明^ニ此義^ニ非^ス唯限^ニ顯密二教^ノ定判^ニ淨土宗亦以^テ同^シレ^ニ之^ヲ

〈訓〉

淨土宗に約せば、善導『觀經の疏』の第二に云ふがごとし。

發菩提心と言ふは、此れは衆生の欣趣大を明す、等と（云云）。
〈具さには上に引くがごとし〉。此れ又た菩提心の義を明すに、善願を以て本とせり。道綽の『安樂集』に『淨土論』を引きて此の義を明せり。唯だ、顯密二教の定判に限るに非ず。淨土宗も亦以て之に同じ。

註

(51) 善導『觀無量壽仏經疏』第二（『大正蔵』三七、二六〇頁、上）。

(52) 「上」、卷上、六丁オウ。

(53) 「善願」善い願い・善を行なう人々の希望（『中仏』中、一〇二六頁）。

(54) 「道綽」、道綽禪師・西河禪師（『往生西方淨土隨心伝』（『大正蔵』五一、一〇五頁）・『望仏』四、三八七四〜三八七五頁参照）。

(55) 世親『淨土論』（『大正蔵』四〇、八四二頁）。

(56) 『安樂集』（『大正蔵』三七、七頁、下）。

(57) 「顯密二教」、顯教（あらわな教え）と密教（秘密な教え）（『中仏』上、四一五頁）。

是^ノ故^ニ富^ル知^ル四十八^{【二丁ウ】}願者^ハ彌陀如來在^ニ因地^ニ時^ニ以^テ衆生^ヲ爲^ス所緣^ト愛^ス樂^ス萬徳所成依正^ヲ攝^リ取^リ彼功德^ヲ令^シ來^ニ属^ス已^ニ故名^ニ願^ト也此言^レ非^ニ菩提心^ニ者^ハ四十八願其体是爲^ニ何等^ト乎^ヤ

〈訓〉

是の故に、当に知るべし。四十八願は彌陀如來因地に在りし時、衆生を以て所緣と爲して、万徳所成の依正を愛樂す。彼の功德を攝取して己れに來し属せしむるが故に願と名づくるなり。此れ菩提心に非ずと言はば、四十八願、其の体、是れ何等とか爲んや。

註

(58) 「因地」、未だ完成を見ない出発点の時・仏となるための原因としての修行の階梯・修行の段階（『中仏』上、八七頁）。

(59) 「所緣」、仏語。認識主觀である心の対象として精神作用をひき起こさせる客觀。心が認識する対象となるもの。能緣に對していう語（『日国』七、三〇九頁）。

- (60) 「成す」、出来上がる・仕上がる・定まる・終わる・おこる・なす
 (『大漢和』五、八頁)。生む・つくる・ある行為をする・行なう
 (『日国』十、一五八～一五九頁)。

- (61) 「依正」、依法(環境世界)と正法(我々の身心)・国土とそこに住む人々・国土と衆生・世界と人々(『中仏』上、二二八頁)。

- (62) 「摂取」、収め取る・引き受ける・選び取る・(『中仏』中、一〇一三頁)。

若言^{イハトモ}雖^レ説^ト彌陀如來自^ノ菩提心^ヲ未^タ説^カ因位^ノ行者^ノ菩提心^ハ者^ハ諸經論^ノ中^ニ明^ニ菩提心^一説^テ過去現在諸佛菩薩發心^ヲ勸進^{セリ}凡夫行者^ノ佛佛道同^{ナルカニ}故^ニ此外更無^ニ異徹^{トモ}雖^レ有^ト説^{コト}因起^ノ次第^ヲ是又不限^ス一人^ニ三世道同之儀式也若^シ以^テ何簡別^{シテ}可^レ云^フ不^レ説^キ菩提心^ニ乎此言非^ハ罵^シ阿彌陀如來^ヲ毀^ス謗^中往生經^上乎^ヤ

〈訓〉

若し、「弥陀如来の自らの菩提心を説くと雖も、未だ因位の行者の菩提心を説かず」と言はば、諸経論の中に菩提心を明すには、過去・現在の諸仏・菩薩の発心を説きて、凡夫行者を勧進せり。仏仏道同なるが故に、此の外に更に異徹無し。因起の次第を説くこと有りと雖も、是れ又一人に限らず、三世道同の儀式なり。若し尔らば、何を以て簡別して「菩提心を説かず」と云ふべきや。此の言は、阿弥陀如来を罵^ば詈^りし、往生経を毀謗するに非ずや。

註

- (63) 「勧進」、刺激する事・進める事・人を進めて仏道に入らせ、善根功德を積ませる事(『中仏』上、二八三頁)。

- (64) 「仏仏道同」、【参考】曇寂『大日経住心品疏私記』「一切如来平等種子者。即指前業寿種。即是仏種故。一切諸仏皆悉從此種子而生。故云一切如来平等種子。平等者。仏仏道同義也」(『大正藏』六十、四七二頁下)。「華嚴一乘位中開廓心境仏道同仏光觀法門(仏光觀広次第)」「(『明恵上人資料』三所収)。

- (65) 「異徹」↓「異轍」、規則則ち宗旨を異にする意(『中仏』上、七七頁)。規則や教えが異なる事(『日国』一、一二二〇頁)。道を異にする・異なつた道(『大漢和』七、一二二三頁)。

- (66) 「因起」、事柄の起こる原因(『中仏』上、八六頁)。

- (67) 「儀式」、法則、作法、式典(『中仏』定、二六〇頁)。

- (68) 「簡別」、えらびわけ(『大漢和』八、八五三頁)。

- (69) 「罵詈」、相手に向かつて悪口を言う事・ののしる(『日国』十、一四二五頁)。

- (70) 「毀謗」、そしる(『大漢和』六、七八七頁)。

次言^フ下^ノ彼經先滅^ニ菩提心之行何因修^チ之此言何謂^ハ乎念佛行者立^{ツル}不^ス可^レ有^ニ菩提心^一之事此言【三丁オ】弥^{ヨイ}顯然也既立^ニ念佛止住之義^ヲ然^モ撥^ス去^ス菩提心^ヲ非^ス唯限^ル汝之在世^ニ令^{シム}下^ニ萬年以後念佛者悉断^中佛^上【三四一頁上】子之称^ハ是断^ニ衆生之慧命^ヲ大賊也

〈訓〉

次に、

彼の『経』先に滅しなば、菩提心の行、何によりてか之を修せんと云ふ。此の言は、何の謂ひぞや。「念仏行は、菩提心有るべからず」と立つる事、此の言はに、弥いよ顯然なり。既に念仏止住の義を立て、然も菩提心を撥去す。唯だ汝が在世のみに限るに非ず。万年以後の念仏者をして、悉く仏子の称を断たしむ。是れ衆生の慧命を断ずる大賊^大

なり。

註

(71) 『選択集』第六章（『昭法全』三二五頁）。【参考】『摧邪輪』中、一丁ウにて引用。

(72) 「仏子、仏弟子・仏教信者（『中仏』下、一四五三頁）。

(73) 「慧命」、智慧を命に譬えた語・智慧の法身を寿命に喩えた語・衆生に生まれながらに具わっている法性（さとりの可能性）を持続させるもの（『中仏』上、一二三四頁）。

(74) 「大賊」、大変な悪事をはたらく賊（『日国』八、六九三頁）。

夫菩提心者不可求外即已心性故未可必爲難起也菩提心者若約法此云覺心或云智心若約法喻者或云果道如前出果德圓通故謂於果德通入之道路也果者是涅槃果即法也道者是因即喻也即果之道也依主釋也如法界無差別論云彼果者即涅槃界何者爲涅槃界謂諸佛所有轉依相不思議法身（『文』）

〈訓〉

夫れ、菩提心とは外に求むべからず。即ち、己心の性なるが故に未だ必ずしも起こし難しと為すべからざるなり。菩提心とは、若し法に約せば、此には覺心と云ひ、或は智心と云ふ。若し法喩に約せば、或は果道と云ふ。前に出すがごとし。果徳円通するが故に。謂く、果徳に於て通入する道路なり。「果」とは是れ涅槃果、即ち法なり。「道」とは是れ因、即ち喩なり。即ち果の道なり。依主釈なり。『法界無差別論』に云ふがごとし。

彼の果とは、即ち涅槃界。何をか涅槃界と爲る。謂く、諸仏所有の

轉依相不思議法身なり、と（『文』）。

註

(75) 「己心」、自己の心・自己の一心・主体的な自己の心（『中仏』上、四八七頁）。

(76) 「覺心」、覺醒している心・目覚めた心（『中仏』上、一九八頁）。

(77) 「智心」、種々の説に対して之は善いこれは悪いと選択して善い方をとる心（『中仏』中、一二七三頁）。

(78) 「法喩」、↓「法譬」仏語。法と譬。教えの意味内容とそれを明らかにするための譬喩（『日国』十一、一四六三頁）。

(79) 「前出」、『摧邪輪』中、一丁ウ。

(80) 「依主釈」、複合語を構成する前半の語が後半の語に対して格の関係（前の部分である名詞代名詞が後の部分の性質を制限・規定する）にあるもの（『中仏』上、一二七―一二八頁）。

(81) 「転依相」↓「転依（āśraya-paravṛtti）」迷いの存在の根拠の転換・煩惱を転じてニルヴァーナを得る事（『中仏』下、一二一〇頁）。下劣の所依を転捨して勝淨の依を証得する（『望仏』四、三七七六頁）。

(82) 「不思議」、思慮を超越している事・さとの形容・心の及ばぬこと（『中仏』下、一四三五頁）。

(83) 「法身」、仏の三身（法報身）の一つ・色も形もない真実そのものの体・あらゆるものの根本（『中仏』下、一五三六頁）。

(84) 般若訳『大乘法界無差別論』（『大正藏』三、三二頁、中）。

此果性應得等三因佛性中即名應得因以菩提心名加行因如佛性論【三丁ウ】第二云復次佛性体有三種三性所攝義應知三種者所謂三因三種佛性三因者一應得因二加行因三圓滿因應得因者一空所現真如由此空故應得菩提心及加行等乃至道後法身故稱應得加行

因者謂菩提心由_ニ此_ノ心_ニ故能得_ニ三十七品十地十波羅密助道之法乃至道後法身_一是名加行因。圓滿因者即是加行由_ニ加行_ニ故得_ニ因圓滿及果圓滿_一。因圓滿者謂福慧行果圓滿者謂智斷恩德_{（己上）}

〈訓〉

此の果性、応得等の三因仏性の中には即ち「応得因」と名づく。菩提心を以ては「加行因」と名づく。『仏性論』第二に云ふがごとし。

復た次に、仏性の体に三種三性所摂の義有り。応に知りぬべし。

三種とは、所謂ゆる三因三種仏性。三因とは一は応得因、二は加行因、三は円満因⁽⁸⁷⁾、なり。「応得因」とは二空所現の真如⁽⁸⁸⁾。此の空に由るが故に、応に菩提心及び加行等乃至道後の法身を得べきが故に、応得と称す。「加行因」とは、謂く、菩提心。此の心に由るが故に、能く三十七品⁽⁸⁹⁾、十地⁽⁹⁰⁾、十波羅蜜⁽⁹¹⁾、助道の法乃至道後の法身を得。是れを加行因と名づく。「円満因」とは、即ち是れ加行。加行に由るが故に、因円満及び果円満を得。「因円満」とは、謂く、福慧⁽⁹²⁾の行。「果円満」とは、謂く、智斷恩德⁽⁹³⁾と_{（己上）}。

註

- (85) 「仏性」、仏の性質・仏となりうる可能性・如来藏（『中仏』下、一四五四頁）。『摧邪輪』上（九丁オ）に引用。
- (86) 「加行因」、↓「加行」行為を為す準備・努力する事・修行・準備的行為・準備段階の努力（『中仏』上、三六四頁）。
- (87) 「円満因」、↓「円満」満たす事・成就する事・願が実現される事・条件を満たす事・完全な・全て備えている（『中仏』上、一四七頁）。

- (88) 「二空」、二種の空・人空（我空）法空の略・「我空」とは我存在は五蘊が仮に和合したものであって常一主宰の我なる物はないと理解する事、「法空」とは固体を構成する諸のダルマ（諸法）そのものも自性（自体）がないと説く事（『中仏』下、一二八七頁）。

- (89) 「真如」、かくある事・ありのままの姿・あるがままなる事・普遍的真理・ココロのあるがままの真実・あらゆる存在の真の姿・「真如」は「なる法」として成立している事（『中仏』中、九六九頁）。

- (90) 「能く」、あたう（できる・たえる）（『大漢和』九、三〇七〜三〇八頁）。

- (91) 「三十七品」、「三十七道品」の略・三十七の修行方法↓「三十七道品」さとり智慧を得るための実践修行の方法（『中仏』上、五七九頁）。

- (92) 「十地」、菩薩が修すべき五十二の段階の内、得に第四十一位から第五十位までを十地という（『中仏』中、七六四頁）。

- (93) 「十波羅蜜」、六波羅蜜に「方便」「願」「力」「智」の四波羅蜜を加えたもの・菩薩の実践すべき徳目・「唯識説」ではこの十波羅蜜を菩薩の十地において順次に修行するものとし「十勝行」と名づける（『中仏』中、七〇四頁）。

- (94) 「助道法」↓「助道」さとりを得るための助け・補いとなっている修行道・脇道（『中仏』中、九二四頁）。

- (95) 「福慧」、福德と智慧・二資糧・六波羅蜜（『中仏』下、一四二六頁）。

- (96) 「智」、↓「智徳」、三徳の一つ・ありのままの真実を知った障害のない悟り（『中仏』中、一一七五頁）。

- (97) 「断」、↓「断徳」、諸仏の具える三徳の一つ・解脱徳・一切の煩惱を断じ尽くした徳（『中仏』中、一一六二頁）。

- (98) 「恩徳」、三徳の一つ・世の人を救おうとする仏の願いの力による恵み・仏が大願力を持って衆生を救護される徳・他に恩恵を施す徳（『中仏』上、一七〇頁）。

(99) 天親造真諦詁『仏性論』卷二(『大正藏』三一、七九四頁、上)。

解^{シテ}曰^ク應^ニ得^ル因^ヲ義^ヲ易^ニ知^ル之^ヲ。加行因者有^ニ依主持業^ノ兩釋^ヲ。依^ニ初義^ニ者加行者^ハ即^チ論^ニ下^ニ所^レ出^ス三十七品十地等^ノ諸^ノ加行功德也^ヲ。依^ニ【四丁オ】^ノ菩提心^ニ得^ル此^ノ功^ヲ德^ヲ。故^ニ云^フ。加行因^ト如^シ論^ニ云^フ由^ニ此^ノ心^ニ故^ニ能^ク得^ル三十七品^ヲ等^ニ云^フ。加行之^ハ因也^{ナリ}。依主釋也^{ナリ}。依^ニ後義^ニ者謂^フ依^ニ此^ノ心^ニ因^ニ圓果滿^ス其^ノ果滿者^ハ即^チ得^ル法身^ヲ也^{ナリ}。如^シ論^ニ云^フ。乃至道後法身等^ニ云^フ。加行即^チ因也^{ナリ}。持業釋也^{ナリ}。

〈訓〉

解して曰く、「応得因」の義は之を知り易し。

「加行因」とは、依主・持業の両釈有り。初義によれば、加行とは即ち『論』の下に出す所の、三十七品・十地等の諸の加行功德なり。菩提心に依りて、此の功德を得るが故に「加行因」と云ふ。『論』に云ふがごとし。

此の心に由るが故に、能く三十七品を得、等と云云。

加行が因なり。依主釈なり。後の義によれば、謂く、此の心によりて因円果満す。其の果満とは、即ち法身を得るなり。『論』に云ふがごとし。

乃至道後法身等、と云云。

加行即ち因なり。持業釈なり。

註

(100) 天親造真諦詁『仏性論』二(『大正藏』三一、七九四頁、上)。

(101) 「果満」、仏語。修行の功により「果」としての悟りが完成すること

(『日国』三、九六九頁)。

(102) 天親造真諦詁『仏性論』二(『大正藏』三一、七九四頁、上)。

(103) 「持業釈」、二つの語が合して複合語を作る場合、前の部分の語が後の部分の語に対して形容詞又は副詞又は同格の名詞である関係にあると解釈する事をいう。(『中仏』中、六四四頁)。

圓滿因者唯依主得^ニ名^ヲ謂^フ其^ノ躰^ヲ者^ハ是^レ十地十波羅蜜等^ノ加行功德也^{ナリ}。如^シ論^ニ云^フ。圓滿因者^ハ即^チ是^レ加行等也^{ナリ}。云云。依^ニ此^ノ加行^ニ【三四一頁下】^ノ得^ル圓滿^ヲ。故^ニ云^フ。圓滿因^ト圓滿^ノ之^ハ因也^{ナリ}。依主釋也^{ナリ}。因圓果滿^ス德^ハ俱^ニ在^ル果位^ニ。故^ニ不可^ク云^フ。圓滿即^チ因^ト也^{ナリ}。義^ハ准^シ可^ク知^ル。

〈訓〉

「円満因」とは、唯だ依主にのみ名を得。其の体を謂はば、是れ十地・十波羅蜜等の加行の功德なり。『論』に云ふがごとし。

円満因とは、即ち是れ加行等なり、と云云。

此の加行によりて、二の円満を得るが故に「円満因」と云ふ。円満が因なり。依主釈なり。因円果満の徳は俱に果位に在るが故に、円満即因と云ふべからざるなり。義、准じて知るべし。

註

(104) 天親造真諦詁『仏性論』二(『大正藏』三一、七九四頁、上)。

良^ニ以^テ我^ノ法^ニ二^ノ執^ハ必^ズ依^テ妄^ニ緣^ニ生^シ畢^シ竟^シ無^ニ自^ラ性^ノ無^ニ自^ラ性^ノ故^ニ畢^シ竟^シ真^ニ空^{ナリ}指^シ此^ノ真^ニ空^ヲ理^ヲ名^ニ三^ノ空^ノ所^レ現^ル真^ニ如^{ナリ}此^ノ真^ニ如^{ナリ}【四丁ウ】^ノ中^ニ有^ル三^ノ空^ノ恒^ニ沙^ニ性^ノ功^ヲ德^ヲ此^ノ性^ノ功^ヲ德^ヲ始^ニ顯^ル現^ル名^ニ加^ニ行^ノ因^ト即^チ是^レ菩^ニ提^ノ心^ニ也^{ナリ}如^シ論^ニ云^フ。加行因者謂^フ菩^ニ提^ノ心^ニ等^ニ云^フ。

云^ニ終顯現^{スルヲ}名^ニ圓滿因^ト即是^{チレ}三十七品等加行功德也如^シ論云^ニ因圓滿者即是加行等^ハ云云

〈訓〉

良^{おもん}に以みれば、我法^⑩の二執^⑪は必ず妄縁^⑫によりて生ず。畢竟^⑬じて自性^⑭無し。無自性の故に畢竟真空^⑮なり。此の真空の理を指して「二空所現の真如」と名づく。此の真如の中に不空恒沙^⑯の性功德^⑰有り。此の性功德、始めて顕現するを「加行因」と名づく。即ち是れ菩提心なり。

『論』に云ふがごとし。

加行因とは、謂く、菩提心なり等、と云云

終に顕現するを「円満因」と名づく。即ち是れ三十七品等の加行功德なり。『論』に云ふがごとし。

因円満とは、即ち是れ加行等、と云云

註

(105) 「良以(まことに)もつて」、程度の甚だしい事を強調する語・まったく・本当に(『日国』十二、三七五頁)。古訓「おもんみれば」(『大漢和』四九頁)。

(106) 「我法」、我と諸法(『中仏』上、二二二頁)。↓「我執」我(アートマン)が実在するというとらわれ・自己の見解にとらわれて離れない事・自己を中心と考えるという執著(『中仏』上、二〇六頁)・人間の本质として固定した実体的なものがある(人我)と考える事(『中仏』下、一五〇七頁)。「法執」全ての存在(法)にそのものの本质として固定した実体的なものがある(法我)と考える事・とらわれた迷いの見解(大乘仏教ではこれに対して「人法二無我」を説く)・教えに執着する事(『中仏』下、一五〇七頁)。

(107) 「妄縁」、むなしい無意味な内的外的な縁・衆生の誤った考えを引き起こす機縁となる事物をいう(『中仏』下、一六六〇頁)。

(108) 「畢竟」、①(名詞梵 *atyanta* の訳語。「畢」も「竟」も終わる意)仏語。究極、至極、最終などの意・②(副詞)途中の曲折や事情があつても最終的に一つの事柄が成り立つことを表わす。つまるところ。ついには。つまり。結局(『日国』十一、三三三頁)。↓「畢竟ず」考えを最後のところまで押しつめる。物事に一つの結論を出す。「畢竟ずるに」せんじつめてみると。結論するに。「畢竟は」せんじつめてみると。結局は(『日国』十一、三三三頁)。

(109) 「自性」、それ自体の定まった本質・ものそれ自体の本性・固有の性質・本体・本性・自己存在性(『中仏』中、六六六頁)。

(110) 「真空」、アートマンが存在しない事・真理の本性が(真如)が凡夫の迷いの考え方を離れている状態(『中仏』中、九四四頁)。

(111) 「不空」、空でない事(『中仏』下、一四二六頁)。↓「空」諸の事物は因縁によって生じたものであつて固定的実体がないという事・縁起しているという事(『中仏』上、三二二頁)。

(112) 「恒沙」、ガンジスにある砂のように数え切れない無数なる様をいう(『中仏』上、四三六頁)。

(113) 「性」、本体・本質・自性・原因・不変なる本性・如来蔵・真如・種性・特性・固有の性質・全てのものの本質・仏となりうる要素(『中仏』中、八二六〇八二七頁)。

(114) 天親造真諦訳『仏性論』二(『大正蔵』三二、七九四頁、上)。

(115) 天親造真諦訳『仏性論』二(『大正蔵』三二、七九四頁、上)。

然^レ則^ハ真如性^ハ在^ニ下^ニ如^シ白布^ノ於^テ此^ニ上^ニ有^リ我法^ニ執^ル假文^ノ假文^ハ必^ズ無^ク實体^ニ故^ニ於^テ真如性^ノ上^ニ無^シ擁^塞塞^{スルコト}是^ニ故^ニ聞^ク薰智水洗^フ真如性德^ヲ地^ニ自性顯發^{シテ}假文速滅^ス假文依^カ地^ニ故^ニ無^ク義成^ニ以^テ文^ノ无^ク体^{ナラフヲ}故^ニ妄執^チ即^チ不^レ生^セ淨水與^ト白^ク地和合^{シテ}无^ク二^{ナリ}理智冥合^{シテ}離^レ能取所取^ヲ是^ニ名^ニ不^レ思議法身^ニ果德圓通^ニ義大旨^ニ如^シ是^レ

〈訓〉

然れば則ち真如性は下に在り。白布のごとし。此の上において、我法二執の仮文有り。仮文は必ず実体無きが故に、真如性の上において、擁塞すること無し。是の故に、聞熏の智水、真如性徳の地を洗ふ。自性顕発して、仮文、速かに滅す。仮文は、地によるが故に、無体の義成ず。文、無体なるを以ての故に、妄執、即ち生ぜず。浄水と白地と和合して無二なり。理智冥合して、能取所取を離れたり。是れを不思議法身と名づく。果徳円通の義、大旨是のごとし。

註

- (116) 「真如性」、ものごとのありのままの姿、真理（『中仏』中、九七〇頁）。「性徳」、一切衆生が各々本性の上に善惡と迷誤の性質を有すること（『中仏』中、八八九頁）。
- (117) 「仮文」、↓「仮」仮に想定されたもの。施設。実在しないけれども比喩的な意味で在りと説くこと（『中仏』上、三五五頁）。
- (118) 「擁塞」、ふさぐ・押し詰めること（『大漢和』五、四〇三頁）。
- (119) 「聞薫」↓「聞薫習」聞くことよって生じた潜在余力・仏の教えを聞いて後に真実に目覚める因であるものを指す・仏の教えをしれば聞いて起こる智慧・法界から流れ出た聴聞の残した影響力（『中仏』下、一六七〇頁）。
- (120) 「智水」、智慧を水に譬えていう・仏法の智慧の水・仏法そのもの（『中仏』中、一一七三頁）。
- (121) 「地」、所依の義（『大漢和』一一八九頁）。万物の生存する基盤としての大地・本来のもの・本質的なもの・基本となるもの・他に発展するものとなるもの（『日国』六、四三二頁）。
- (122) 「妄執」、仏語。悟りを得られずに、迷いの心から物事に執着すること。虚妄の執念。妄念（『日国』十二、一二二七頁）。

- (123) 「白地」、↓「白」隠さずありのまま・善（『中仏』下、一三九九頁）。

(124) 「和合」、統一の取れた・協同・調和・種々の要素が結合して一つのものを構成する・集合する・別々のものが互いに到達する・混ざる諸の原因が協同し調和して働くこと・結合すること（『中仏』下、一七八二〜一七八三頁）。

(125) 「理智」、道理と智慧（『中仏』下、一七二四頁）。

(126) 「冥合」、ぴったり合う・一致する（『中仏』下、一五九二頁）。

(127) 「能取」、知るもの・主観・認識主体・執着する主体（『中仏』下、一三三九頁）。

(128) 「所取」、知られるもの・客観的対象・客観・執着されるところのもの（『中仏』中、九一九頁）。

是故菩提心亦名道心。若言【五丁才】其体者智也。若約喻者即是中間無擁塞也。譬如世人若向牆壁等有問上為道耶。為非道耶。可答言。是即為非道。中間擁塞不可通。故若有向門戸問。道非道者。可答言。此為道。中間無擁塞。可通行。故此亦如是。

〈訓〉

是の故に、菩提心、亦是「道心」と名づく。若し其の体を謂はば「智」なり。若し喩に約せば、即ち是れ「中間無擁塞の称」なり。譬へば、世人、若し牆壁等に向ひて、問ふこと有らんがごとし。道とや為ん、非道とや為ん。答へて言ふべし。是れを即ち非道と為す。中間擁塞して通づべからざるが故に。若し門戸に向ひて、道・非道、問ふこと有らば、答へて言ふべし、此れを道と為す。中間擁塞無くして通行すべきが故。此れも亦た是のごとし。

註

- (129) 「道心」、さとりを求める心・自らさとり人々を覚らせる心・他人を救おうとする心(『中仏』下、一二四二頁)。
 (130) 「擁」、まもり・もつ・とる・したがえる・塞ぐ・包む・蓄える(『大漢和』五、四〇二頁)。
 (131) 「称」、かなう・てきする・たてる・はかる・言う(『日国』七、十七頁)。よびな(『日国』七、二二頁)。
 (132) 「墻壁」、囲いの壁(『大漢和』七、五九三頁)。

應得因性法爾有之加行圓滿二因待因緣顯發其因緣非一觸類繁多是故經中說發心因緣出慈心悲心施心慳心等種種不同是故有宿善人自然感動見聞悉爲道心因緣猶如解寶之人朴石見寶无福之人雖聞教不發心猶如盲者遇日光無中所見上

〈訓〉

応徳因の性は、法爾として、之れ有り。加行・円満の二因は、因縁を持して、顕発す。其の因縁、一に非ず。類に触れて繁多なり。故に『經』の中に発心の因縁を説くに、慈心・悲心・施心・慳心、等の種々の不同を出せり。

是の故に、宿善ある人は、自然に感動す。見聞悉く道心の因縁たり。猶し、解宝の人の、朴石を宝と見るがごとし。無福の人は、教えを聞くと雖も発心せず。猶し、盲者の日光に遇へとも所見無きがごとし。

註

- (133) 「法爾」、自然の定まり・自然に・もともと・法としてそのまま・も
 とからそのまま・任運・本来・本来あるがまま・真実の姿(『中仏』

下、一五一五頁)。

- (134) 「因縁」、原因・直接の原因・他の縁によること・縁起(『中仏』上、九二頁)。
 (135) 「顕発」↓「顕」あきらか・あらわに・あきらかに・鮮やか・鮮明・著しい・著名・おもてむき・明らかにする(『大漢和』十二、三一八頁)。「発」おこす・おこる・でる・おこなう・あらわす・あらわれる・開く・あきらかにする・あばく(『大漢和』七、一二一八頁)。
 (136) 「触類」、類に随つておし及ぼす(『大漢和』十、三七八頁)。「類」たぐい・同族・種類・かたどる・似る・かたち・すがた・様子・よい(善)・おおむね(『大漢和』十二、一九七・一九八頁)。五官が触れるすべてのもの。目に見、耳に聞く、外界のあらゆるもの(『日国』七、三四五頁)。

- (137) 「慈心」慈しみの心・(『中仏』中、六七三頁)。

- (138) 「悲心(いしん)」、怒る心(『中仏』上、四七頁)。

- (139) 「施心」↓「施」施すこと・与えること(『中仏』中、九九七頁)。

- (140) 「慳心」、自分のものを他人に与えることを惜しむ心(『中仏』上、四〇六頁)。

- (141) 『大方便仏報恩經』(『大正藏』三、一三六頁、上・下)。

- (142) 「宿善」、かつて過去につくられた善・前世の善業(『中仏』中、七九一頁)。

- (143) 「朴石」↓「朴(はく)」朴硝は、薬石。(『大漢和』八、三四三頁)。

既説嗔恚慳貪等猶爲發心因縁何況有弥陀一【三四二頁上】教【五丁ウ】時何不下發菩提心修菩提行耶設雖无餘事彼時若有大種姓人聞弥陀名号有下生大信心生中大歡喜此即可爲大菩提心念佛号乃至不惜身命等此即可爲大菩提行

〈訓〉

既に、瞋恚・慳・貪等を説きて、猶し、発心の因縁と為す。何に況や、弥陀の一教有らん時、何ぞ菩提心を発し、菩提の行を修せざらんや。設ひ、余事無しと雖も、彼の時、若し大種姓⁽¹⁴⁾の人有りて、弥陀の名号を聞きて、大信心を生じ、大歡喜を生ずること有らん。此れ即ち、大菩提心と為すべし。仏号を念じ、乃至身命⁽¹⁵⁾を惜まざらん等、此れ即ち、大菩提行と為すべし。

註

(14) 「種性」、生まれつきの性質・修行する人の素質・さとりをひらく素質・さとりの種(『中仏』中、七九九頁)。

(15) 「身命」、肉身と寿命・命・体・自己の存在(『中仏』中、九七五頁)。

(よねざわ みえこ 嘱託研究員、浄土宗総合研究所嘱託研究員)